一

安永三年正月、江戸を震撼させる事件起こった。

元旦の薄明かりの中、市谷八幡に初詣に来た石工の茂蔵が、石段の傍らに奇妙なものを見つけた。

市谷八幡は、文明八年に太田道灌の鎮守として、鎌倉の鶴岡八幡を勧請して創建したものだ。最初は外堀近くにあったが、寛永年間の外堀改修に伴い、市谷御門が造られ、西側に寄った尾張中納言家の上屋敷隣に移された。

鶴岡八幡に対し、末社の市谷八幡は亀岡八幡とも呼ばれ、江戸の八大八幡の一つに数えられる。

境内に昇る石段の途中に世俗茶の木稲荷があって、目を患った者が年の始めに茶断ちの日数を決めて祈願すると、霊験あらたかだと多くの参詣人を集めていた。

元旦の七つ時分のこと、あたりはまだ薄暗かった。

蕾を膨らませ始めた桜の木から、なにかがだらりと垂れている。

「なんでえ、花見の幔幕けえ」

ぼおっと霞んだ両眼をこすったがはっきりしない。茂造は、近寄って手で触ってみた。

（なんでえ、この冷たさはよ……）

次の瞬間、茂造の口から悲鳴が上がり、市谷八幡の境内に響き渡った。

すでに初詣で客の溜めに社殿で待機していた神官たちや宮男たちがこの悲鳴を聞きつけた。

鳥居を潜って石段下に走ると、男が階段の途中で腰を抜かしていた。

「どうしなさった」

白衣の宮男が駆け寄りざまに訊いた。

「く、首吊りだ……」

茂造が指差した桜の枝から死体がぶら下がっていた。

「正月早々なんてことを」

禰宜が愕然とした声を発した。

宮男が首吊り死体を眺め上げ、提灯の明かりを近づけた。女である。

「高力様の奥方様ですぞ」

「なんですと！確かか」

四谷御門に寄ったところに拝領屋敷を持つ寄合席三千石の高力家は、市谷八幡の有力な講中の一人で、代々の付き合いがあった。

当主主税の奥方は数年来、眼病を患い、世俗茶木稲荷に日参していたから、宮男のだれもが承知していた。

「だ、だれが、お屋敷にお知らせなされ！」

禰宜の命で一人の宮男が石段を走り下りていった。

これが江戸を騒がす事件の発端となった。

深川六間堀の金兵衛長屋の正月は、いつもより遅く始まった。

元々大晦日は夜半まで掛取りが長屋に入ってきて、付けの払いを催促し、その用意ができない住人は、九尺二間の長屋にひっそりと息をこらしていた。

そんな掛取りと住人の攻防が除夜の鐘が鳴り響く頃まで続くのである。

付けを払い終えた家も新年に回した家も、年越し蕎麦を食しながら自ら百八つの鐘の音を聞いた。

坂崎磐音がほろ酔いの足取りで金兵衛長屋に戻ってきてのは、百八つの煩悩の鐘がまだ大川の川面に響いている刻限だ。

酒は吉原会所のかしら、四郎兵衛に馳走になったのだ。

井戸端で水を飲み、厠で用を済ませた磐音は、長屋に戻ると冷たい夜具を敷き伸べて眠りに就いた。

磐音が目を覚ましたのは、

「長屋の連中はまだ眠っているのかい。いくら正月だからって、お天道様は高く昇ってなさるぜ」

という大家の金兵衛の大声が聞こえたからだ。

「大家さん、正月くらいゆっくり寝かせてくんな」

水飴売りの五作が文句を言ったが、

「もう四つに近えや、元旦早々に寝坊をすると一年中怠けることになるぞ」

と金兵衛に一蹴された。

磐音は、鰹節屋から貰ってきた箱の上に安置した手造りの三柱の位牌の前に座ると、正月元旦の挨拶をした。

位牌の主は、豊後関前藩六万石の騒動に絡んで犠牲になった幼馴染の河出慎之輔、舞夫妻に小林琴平だ。

「慎之輔、琴平、舞どの、おめでとうござる」

磐音はさらに四本の扇を手にした。

許婚の奈緒が、身売りされた肥前長崎の丸山、長門の赤間関、京の島原、そして加賀金沢の遊郭に残していた品々だった。

「奈緒、いかなる境遇にも負けることなく達者で暮らせよ」

磐音はそう扇に話しかけると、顔を洗うために、手拭いをてに立ち上がった。

「大家どの、明けましておめでとうござる」

「坂崎さんか、おめでとうさん。本年もよろしく願いますよ」

どてらを着て井戸端に仁王立ちする姿は、長屋の住人の最後の一人が起きるまで見届けるぞという気迫に溢れていた。

「浪人さん」

磐音を呼ぶ声が木戸口でした。振り向くと幸吉が立っていた。少年は深川暮らしの大先輩、鰻捕りの名人だ。

「初湯に行かねえか」

「初湯か、いいな」

正月三が日の湯は初湯、または若湯といった。

「待ってくれ」

磐音は長屋に戻ると財布を懐に捩じ込んだ。

「浪人さん、お捻りを用意したかい」

「お捻りとはなにかな」

「まだ深川暮らしが半場だな。今年最初の紋日だぜ、十二文を半紙に包んで番台に積み上げるのが習わしだ」

「半紙があったかな」

首を捻る磐音に、

「子供に江戸暮らしを教わっているようじゃ、今年も前途多難だねえ」

五作の女房のおたねが半紙を一枚くれた。磐音は財布から十二文を数えて包み込むと、

「これでよし」

と呟いた。

「まあ、ゆっくりと去年の垢でも落としてきなされ」

金兵衛の言葉に見送られて、磐音と幸吉は六間湯に行った。

銭湯の入り口には門松が飾られ、番台には主の八兵衛が古びた羽織袴の礼装で座っていた。

「おめでとうございます」

新年の挨拶を交わした磐音は、蓬莱飾りが置かれた蕎麦の駕籠にお捻りを積んで脱衣場に上がった。まだそう混んでいるふうはない。

番台を振り向くと、

「松の内　湯番尊く　見えるなり」

と川柳に詠われたように、八兵衛の姿が清々しくも尊く見えた。

二人は洗い場で互いの背中を流し合って石榴口を潜った。

若湯に手足を伸ばして浸かった。

「浪人さん、今年の願いはなんだい」

幸吉に訊かれて磐音は答えに窮した。

むろん、許婚の奈緒を苦界から救うことだが、千両を超える値がついた遊女を身請けする才覚はなかった。

昨夜も四郎兵衛と年越しの酒を酌み交わしながら、磐音は改めて奈緒を遊里の外から見守るべく決意していた。

「息災に過ごせればそれでよい」

「息災ってのは、元気に暮らすということかい。夢がねな」

「幸吉どのの願いはなんだな」

「そりゃあ、鰻がどっさり捕れてよ、宮戸川の親方が高値で買い取ってくれればそれでいいや」

幸吉の夢もささやかだった。

身分制度がきっちりした江戸時代、長屋に住む町人がご大層な夢を抱いたところで、それこそ描いた餅だ。そのことを幸吉も承知していた。

磐音も、その日その日をしっかり暮らそうと湯の中で決心した。

「幸吉どの、元日では食い物屋も開いておるまい。店開きしたら、どこぞに美味しいものでも食べに行こうか」

「懐は大丈夫かい」

「心配めさるな。思わぬ実入りがあったゆえ、懐が温かい」

年の暮れに待合ノ辻で、押し込みを働いた元今治藩士を始末した礼にと、吉原会所の四郎兵衛が十両を送ってくれたのだ。

「じゃあさ、浅草奥山に連れて行ってくんな」

「承知した」

磐音と幸吉は湯の中で指切りをすると若湯を上がった。

金兵衛長屋の木戸口には待ち人があった。

南割下水吉岡町の裏長屋に住む浪人者、竹村武左衛門の娘の早苗だ。

磐音は正月早々武左衛門がなにかやらかしたかと緊張した。だが、九つになった早苗の顔はにこにこと笑っていた。

「坂崎様、新年おめでとうございます」

「穏やかな年明け、おめでとうござる」

「坂崎様、もしお暇なれば、わが家に雑煮なとたべに来てくだされと、父の伝言にございます」

磐音は六間湯からの戻り道、大根の切れ端が残っていたことを思い出し、雑炊でも作ろうかと考えながら帰ってきたところだ。

武左衛門は一人暮らしの磐音を心配して招いてくれたのか。

「ありがたい、すぐ仕度いたす」

磐音は長屋に飛び込むと着流しに大小を差し落とした。ついでに隣の五作の長屋の戸を開き、

「おかみさん、すまぬがもう一枚半紙をいただけぬか」

と頼んだ。

「また湯かい」

そういながらおたねが半紙を一枚くれた。

「相済まぬ」

磐音は五作の長屋を出たところで二分を半紙に包んだ。

竹村武左衛門のに呼ばれたというのに年賀の一つも用意していなかった。

自称元伊勢・津藩藤堂家家臣、ただ今は南割下水の半欠け長屋の住人の武左衛門には、女房の勢津と、早苗ら四人の子供があった。皆が食べ盛りである。武左衛門が時に用心棒やら溝浚いをし、勢津が袋張りの内職をしてなんとか一家を支えていた。

六間堀から竪川に架かる二ッ目ノ橋を渡り、磐音と早苗は南割下水に出た。この界隈は陸奥弘前藩の上屋敷を中心に高禄の旗本衆が屋敷を構える一帯で、閑静な家並みが続いていた。貧乏御家人の住む北割下水とは対照的だが、半欠け長屋は、南割下水も北に寄った本所吉岡町のどんづまりにあった。表の屋敷町のとは一変する界隈で、正月の風に土埃が上がっていた。

「坂崎様、品川様もお呼びしてございます」

磐音は、北割下水に拝領屋敷を構える御家人の次男坊・品川柳次郎、竹村武左衛門とは、両国西広小路の両替商今津屋で知り合った。暮れも三人で今津屋の用心棒稼業をしてなんとか年の瀬を越した。

（二人も食膳に呼んで大丈夫かな）

磐音はいささか心配になった。

「坂崎様、年の暮れに父上が魚河岸に参り、たくさん仕入れてこられました。ご懸念は無用にございます」

貧乏浪人とはいえ、さすがに武士の娘だ。磐音の胸の内を察したか、早苗にしっかりした挨拶を返された。

さらに早苗は言った。

「普段、お腹を空かせておりますゆえ、正月くらい心ゆくまでたべようと、魚や野菜を買出しに行かれました」

「さすがに所帯持ちは心得が違うな。わが家には、大根の切れ端が残っていただけじゃ。それで雑炊でも作ろうかと考えていたところゆえ、助かった」

正月にもかかわらず干された洗濯物の下を潜って半欠け長屋の木戸口にたどりついた。傾いだ木戸に裏白の注連飾りが晴れやかに飾られていた。

「おう、来られたか」

襷掛けの武左衛門が七輪に火を熾していた。

「お招きにいあずかり、厚かましくも参上いたしました」

「どうせ独り者だ、食うに困っておると思ってな。迷惑ではなかったかな」

「早苗どのにも申したが、大根の雑炊でもと考えていたところゆえ、ありがたいことです」

「今日はな、いつも世話になるで、食べ物と飲み物はふんだんに用意した」

「魚河岸まで仕入れに行かれたそうですね。さすがに所帯持ちは違うと感心していたところです」

磐音は半紙に包んだ二分を差し出した。

「なんの用意もしておりませぬゆえ、ほんの気持ちばかりです」

「なにっ、金か。そのような心遣いは無用じゃ」

と言いながら武左衛門の手が伸びて受け取り、

「二分も包んだか」

と触っただけで中身の額を言い当てた。

その包みを早苗がすいっと摑み、

「父上に持たせますと酒に化けてしまいます。坂崎様のお気持ちは母上にお伝えします」

と家の中に持っていった。

「坂崎さん、それがし一人のときに渡して欲しかったな。一瞬の間であった」

と手に残った感触を恨めしげに見詰めた。

「早苗が申した魚河岸の件じゃがな、鰤のあらをただ同然に集めてきただけだ。あまり期待されても困る」

「そうでしたか、いささか安心しました」

「だいこんや小松菜といっしょに鍋に仕立てにしようと思っておる。餅もあるでな、量だけはある」

武左衛門が言い訳をしたとき、

「ご両者、明けましておめでとうございます」

と品川柳次郎が大徳利をぶら下げて姿を見せた。

磐音と武左衛門は新年の挨拶を返した。

「竹村さん、酒を持参せよというから、家の台所からちょろまかしてきた」

「これで料理も酒も揃ったな。さあ、当屋敷に入ったり入ったり」

屋敷と呼ぶにはおこがましいが、普段内職の袋張りをする四畳ほどの板の間とその奥の四畳半が片付けられ、板の間には七輪が一つ置かれて、すでに湯気を上げる土鍋が乗っていた。

その回りに食べ盛りの子供らが七輪を囲むように座っていた。

「勢津どの、新年おめでとうございます。それに本日は思いがけなくもお招きにあずかり、ありがとうございます」

磐音は履物が重なり合う土間で頭を下げると、

「坂崎様、品川様、旧年中は宿がお世話になりました。本年もよろしく」

とうっすらと化粧をした勢津が挨拶を返す。

「坂崎さん、玄関先に発たれたのでは奥座敷に通れぬわ。挨拶はそれくらいにして上がってくれ」

磐音と柳次郎は奥の四畳半に通る。そこへ武左衛門が熾したばかりの七輪を、勢津が磐音らの土鍋を運んできて、二つの鍋が揃った。

「酒器はない。茶碗酒で我慢してくれ」

大徳利から直に茶碗へと酒が注がれ、主の武左衛門の音頭で改めて新年の賀を交わし合った。

大晦日の酒は既に初湯で抜けていた。

「美味いな」

武左衛門がお思わず洩らし、柳次郎に顔を向けた。

「坂崎さんは独り者ゆえ呼び立てるのに心配もせぬが、そなたのうちは直参旗本、正月早々出歩いてよかったか」

「直参旗本が聞いて呆れる。昨夜の借金取りと母上の攻防戦を見せたかったな。金がないのには慣れているが、せめて大晦日くらい払いをきっちりとつけて年越しがしたかった」

「何処も同じ年の暮れか」

と嘆息した武左衛門が磐音を見た。

「吉原会所に出向かれたそうだが、奈緒様のこと、なにか分かったかな」

「江戸町二丁目の丁子屋におるそうにございます」

「なにっ、大籬ですか」

柳次郎が声を上げた。

「根岸の寮に遊芸百般を教え込まれて、この七日には吉原へ賑賑しく乗り込まれるとか」

「坂崎さん」

柳次郎が磐音を見た。

「奈緒どのの身にかかった金は千両を超えております。もはや、それがしの手が届くものではない」

「このまま手を拱いておられるのですか」

「…………」

磐音の沈黙に柳次郎も言葉に窮し、武左衛門が、

「正月をようよう迎えることができたわれらでは、如何ともしがたいな」

と諦めの言葉を吐いた。

「そのようなことでいいのですか」

柳次郎が気色ばむのを磐音は制して、

「今日は正月元旦、皆様と楽しく酒を飲みとうございます」

と微笑みかけた。哀しげな顔をした柳次郎に武左衛門が言った。

「柳次郎、この世の中にはままならぬことのほうが多い。ここは坂崎さんの心情を察してやれ」

と大徳利を持ち上げた。